

受賞のことば

## 社会保険の抱えるジレンマ

法政大学教授 酒井 正

パートタイマーや派遣労働者といった「非正規雇用」と呼ばれる人びとの比重は増加の一途をたどっており、労働市場における非典型的な働き方と位置付けられることはもはや適切ではない。しかし、その非正規雇用のセーフティーネットは脆弱なままである。正社員のように雇用が盤石な労働者しかセーフティーネットの恩恵に与れないとしたら、なんとも皮肉なことではないだろうか。

だが、そのような雇用形態の間に見られる「セーフティーネット格差」を白日の下に晒すことが、本書の目的だったわけではない。むしろ本書は、そのようなセーフティーネットの格差を是正することがなぜ難しいのか議論することに紙幅を割いた。

保険料の拠出を給付の条件とする社会保険では、非正規雇用や無職の人びとが受給し難くなるのは仕方ない側面がある。したがって、保険料の拠出とは関係なく給付を行えるようにすることが、非正規雇用にも行き届くセーフティーネットを整備するうえでの前提となる。とはいえ、そこにもまた、モラル・ハザードや財源といった様々な問題が立ちはだかっているのだ。だが、なによりも問題なのは、そのような社会保険の抱えるジレンマが、人びとにはほとんど意識されていないことではないだろうか。社会保険を主としたセーフティーネットが本質的に抱える困難を、人びとと共有すること。そこに、本書を執筆した最大の動機があった。

議論を進めるにあたっては、実証的であることを心がけ、エビデンスを多く提示したつもりだ。同時に、政策決定においてエビデンスを扱うことの難しさにも言及した。そうは言いながらも、本書を執筆する過程では、むしろ欠けているエビデンスに気付かされるが多かった。それらは、自身に突き付けられた今後の研究課題と認識している。

本書は新型コロナウイルスの感染が拡大する前に執筆したものだが、雇用の危機は今まさに顕在化しつつあり、セーフティーネットの役割が厳しく問われていると感じる。現実の政策も、従来のセーフティーネットから漏れ落ちがちな人びとを念頭に置きながら動いているようだ。このコロナ禍におけるセーフティーネットのあり方を整理するのに、本書が少しでも参考になれば筆者としては有難い。

このような栄えある賞を頂けたことは、様々な方々からこれまで頂いた支援の賜物に他ならない。これを大きな励みとして、更に研究を深めて行きたい。

さかい ただし

00年慶応大卒、08年同大より博士号(商学)取得。国立社会保障・人口問題研究室長などを経て、14年より法政大経済学部教授。76年生まれ。

